



『旬』の食材を『旬』の時期に食べる

カキノキ薬局代表取締役

みやがわ たかゆき
宮川 喬行さん

白衣姿から安心感と誠実さが伝わってくる。京都大学周辺に3店舗を経営し、そのうち1店は漢方薬局である。薬学博士を持つ73歳だ。

「疾患だけでなく全身の症状をみながら、人間がもともと持っている力によって治していくのが漢方なんです」。大学時代から東洋医学や漢方に興味を持ち、父親から薬局を引き継ぐまでは漢方専門の診療所の製薬工場長を務めたこともある。漢方医薬学を本格的に習得できる京都漢方研究会の設立に携わり、現在

は同研究会の副会長だ。

午前5時半には起床し8時には自宅兼本店で仕事を始める。大学時代にはラグビーや野球もやっていたスポーツマンである。「じっとしているのが苦手で、一日中体を動かしているのが健康法ですかね。それにお客さんの健康相談に乗りながら、いろんなことをしゃべっていることが自分の健康法にもつながっているようです」。府薬剤師会や日本漢方交流会の役職のほか保護司を長年務めるなど対外的な仕事も多くバリバリの現役である。

薬局を継ぐ2人の息子さんを含め家族全員は大きな病気をしたことがないという。「家内がいろいろと食事に気を使ってくれているおかげです」と話し、「『旬』の食材を『旬』の時期に食べるのが一番大事です。食養生は健康法の基本です」

「東洋医学・漢方には望診、問診といった診断法がありますが、体質や症状など一人一人にあった『オーダーメイド医療』によるかかりつけ薬局を目指していきたいですね」。優しいまなざしが印象的だった。